

# 脱アイデンティティ

—エリクソンからミード、そしてフーコーへ—

東京都立立川高等学校 菅野功治

## 1. 問題関心

モラトリアム期に、部活動や行事や恋愛などを通じて自己を確立することが課題と教えても、芳しい反応はない。「何か高みから物を言われている気が」して、「真面目」で「健全」すぎると感じるらしい。

倫理の授業の王道といえる「ソクラテス・カント・サルトル → アイデンティティの確立」というラインは堅苦しい感じがするのかもしれない。「ディオゲネス・ニーチェ・フーコー → 脱アイデンティティ<sup>1</sup>」という、いわば裏街道のラインも提示してあげることができないだろうか。

## 2. エリクソンのアイデンティティ概念の教科書の記述（数研出版）

「大人になるということは、個人的には自己の能力・気質・性格などを理解することによって自分を認識し、社会的には自分を取りまく多くの人たちとの生活を通して、自分の立場や責任を自覚し、それに応じた行動がとれるようになることを意味する。このように個人的にも社会的にも自分に対して自信と責任がもてるようになり、自分の人生を納得して生きていけるようになることを、エリクソンはアイデンティティの確立とよんだ。」

確かに、以上の記述からは、アイデンティティの確立＝既存の価値や規範の内面化としか読みとれない。前述のような生徒の感想が出てくる一つの要因と思われる。

## 3. 自己一貫性の困難：鶴見俊輔他『転向再論』

鶴見は『転向再論<sup>2</sup>』（2001）において、「長い人生の中で、人間は何度も転向する。そうしなければ自分を保つことすら難しい」と述べた。そして、その転向の是非をはかる基準点として「アイデンティティ」（＝「思春期に身につけて後は、ずっと変わらない一貫した自己像」のこと）ではなく、

- 
- 1 この言葉は、現代人にとって自我やアイデンティティが不必要になったということを言いたいために用いているわけではない。この言葉は上野氏の同名著書から借りてきたものであるが、本稿は「エリクソンのいうアイデンティティを持つことが出来るのは、社会の中の強者に過ぎないのではないか」という氏の指摘に共感し、規範主義的なエリクソンのアイデンティティ論の改編を目指すものである。その方向性は、情報化・消費社会化という流動的な現代社会の現実のなかでの自我のありようを踏まえたものになるだろう。よって、本稿は自我やアイデンティティを超歴史的で、本質主義的なものと捉える一部の「心理学」とは問題構成を異にするものでもある。
  - 2 かつて『共同研究・転向』をめぐる吉本 vs 鶴見の論争を通じて、転向論は、思想はいかに現実と切り結ぶ批判精神を持続できるか、外に開かれた柔軟さと強靭さを保つことができるのかという核心にまで深められていった。鶴見らは、『転向再論』において自己一貫性という概念の再編を語りながら、改めてその論争を振り返っている。

「インテグリティ」(高潔、誠実)をあげ、それを「まともな人間」として生きていく考えだとした。

われわれは、鶴見らが直面した価値観やイデオロギーが「液状化」した地盤の上に、情報化・消費社会化等による流動性の高まりが襲いかかっているという「不透明」な社会を生きている。

#### 4. 社会の流動化と自己アイデンティティ同心円モデルから多元化モデルへ

社会学者の浅野は、自己アイデンティティのあり方に関する諸条件を激変させた、この15年の日本社会の変化について次の三点を上げている。(浅野:2005) 第一には、労働力市場の流動化に伴う標準的な人生物語の失効である。第二には、消費社会化の進行であり、記号としての商品の消費により自己アイデンティティを構築するという作法が一般化してきた。第三には、情報化の進展であり、とりわけインターネットの普及は、自己の複数制を低リスクで維持・管理できるインフラを提供している。

このような社会の変化が若者の意識や人間関係のあり方に影響を与え、引きこもりや人間関係の希薄化をもたらしているという主張がある。若者による印象的な犯罪が起こったときに声高に語られるこの主張を、希薄化論と呼ぼう。この希薄化論は、自己の中心に唯一の「核」を想定するような同心円モデルを理論的前提としていると言えることが出来る。

ところが、浅野らが神戸と東京で行った青年意識調査等では、関係の希薄化ではなく、状況志向化・選択化という傾向が見られたという。つまり、①つきあいの程度に応じて、友人と話す内容は違うことが多い②いろいろな友人とつきあいがあるので、その友人同士はお互いに知り合いではない③友人と一緒にいても別々のことをしていることが多い、といった質問項目と、④ある事柄について我を忘れて熱中して友達と話すことがよくあるという質問項目の間に有意な相関関係が見られたという。現代の若者達は、遊ぶ内容によって友人を使い分け(選択志向)、場面に依って複数の自己を使い分け関係をマネージ(状況志向)ながら、それなりにその場の関係に没入もしていることになる。そして、「どんな場面でも自分らしさを貫くことが大切」という質問に対する肯定的回答がめだって低下しているのだという。このような選択化論は、多元化モデルをその前提とすることになる。

#### 5. 授業実践

授業では、以上のような流動化する「不透明」社会のなかでの自我のあり方に注目するために、エリクソンのアイデンティティ論を批判的に再考察し、社会関係のなかでの自我に注目する理論としてのミードやゴフマンそしてラカンなどの自己論・自我論との違いを検討した。更にその様な問題関心の延長上に、「脱アイデンティティ」論の先駆として、フーコーの「実存の美学」を紹介した。以下にその一連の授業のポイントを示していく。

##### 1) G.H.ミード 1863-1931

社会心理学者。プラグマティスト。『精神・自我・社会』

##### ①ミード以前の自己論

はじめに自己が存在し、その後に他者との関係が現われてくるものと考えていた。

ex)「我思う、ゆえに我あり」(＝デカルト)

##### ②ミードの自己論：自我意識に対する社会過程の時間的・論理的先在。

a) 社会関係のなかに産み落とされる人間は、まず、他者とのさまざまなやりとりのなかに投げ込まれる。そのなかで、他者と様々なやりとりをしながら(＝社会的相互行為)、次第に他者の視点を取り入れていき、自己が形成され(＝客我、Me)、次第

に「我思う」ことができるようになる（＝主我、I）。「他者の態度が組織化されたセットが『Me』を構成し、人はその『Me』に対し『I』として感応する。<sup>3)</sup>

よって、学校行事や部活動、友人関係や恋愛関係？を通して自己が形成されることになる。自己は、自分の内側にあるのではなく、常に他者との関係のなかにあり、主我は客我に反発したり、新たな自己を想像しようとしたりする。

- b) 他者の視点の取り込みによる客我の形成と自我の発達（＝社会化）は、次の二段階が存在する。

プレイの段階・・・「ごっこ遊び」等を通じて、「重要な他者」と呼ばれる、親や先生などとの個別的・具体的な他者の役割を仮想的に演じて、客我を形成する。

ゲームの段階・・・「野球」など、より抽象的・一般的なルールをもつゲームを通じて、「一般的な他者」の様々な役割を組織化し、そのなかで自分の役割を遂行することを学ぶ。

- c) 人格の多元性は、彼が所属する社会集団の複数性・異質性に対応するが、その同一性は、複数の規範の間の矛盾・対立を調整するより高次の規範を習得することによって保たれる。その高次の審級が、「一般的な他者」である。

## 2) エリクソン 1902-94 『アイデンティティとライフサイクル』 1959 → 73

- 自我同一性 (ego identity) : ミードの I (＝主我) に対応
- 自己同一性 (self identity) : ミードの Me (＝客我) に対応

- 個人的同一性 (personal identity)

- わたしとは何者であるかをめぐるわたし自身の観念

- 社会的同一性 (social identity)

- わたしとは何者であるかと、社会および他者が考えているとわたしが想定するわたしについての観念。しばしば、職業的役割と重なる。

青年期臨床の場で、統合失調症や自殺志願の若者たちに出会ったエリクソンは、これをアイデンティティの危機ととらえ、アイデンティティ拡散症候群と呼んだ。この危機は、個人的同一性と社会的同一性が一致すると解消されるとした。（＝統合仮説）しかし、自宅に帰っても教師のように振る舞う父親は、「過剰同調」である。よって、統合仮説は多元化モデルの一特殊形態であるということもできる。

- \* 近年、統合仮説は情報化社会の進展などの現実のなかで、保守的すぎる見解であり、両者を統合することができるのは社会的強者だけではないかという見方がでてきている。「発達心理学者」の彼は、一生を通じてのアイデンティティ変容を「変容」ではなく

---

3 Me に組み込まれる他者もあれば、そうでない他者もある。他者の視点は、自己に属する視点と見なされたときにはじめて Me となるが、その Me に I が反応すると同時に自己が成立する。

「成長」と捉えるその規範性が指摘されている<sup>4</sup>。

3) リースマン 1909-2002 『孤独な群衆』

「他人指向型」＝消費社会の到来により「一般的な他者」から学ぶべき、社会規範が後退。  
「一貫してひとつの顔を貫き通すというやり方をやめて、いろいろな顔を使い分けるようになってきている。・・・他人指向型の人間が目指すべき目標は、同時代人に変わったのだ。」

4) ゴッフマン 1922-82

社会学者。主著は『行為と演技：日常生活における自己呈示』『スティグマの社会学』。

①アイデンティティ操作：彼は、アイデンティティという概念を、その場その場の他者との相互行為の場面で、提示し **present**、演じ **perform**、管理する **manage** 対象として徹底的に操作的概念として用いた。

アイデンティティ操作の必要性に迫られるのは、「傷つけられたアイデンティティ (= **stigmatized identity**)」の持ち主である社会的マイノリティであるので(場の空気に合わせようとせざるを得ない)、彼の理論は差別論へと接合した<sup>5</sup>。ゴッフマンは、アイデンティティ管理の戦略を四つに類型化した。

a) 印象操作：「なりすまし **passing**」→「告白、自己呈示 **coming out**」

外見だけからはわからない、ユダヤ人や在日韓国人・朝鮮人、ゲイやレズビアンなど

b) 補償努力：「黒人なのに教養がある」「学者なのに美人」「立高生なのにイケてる」  
帰属集団から自分だけ一抜けするための戦略で、裏切り者となる。

c) 開き直り：「**BLACK is beautiful**」「わたしはこのままでいんだ」という弱者の解放戦略。

カテゴリーの政治だけで終わってしまう危険性もある。

d) 価値剥奪：以上のすべての戦略が失敗した後、相対的により弱者である社会的カテゴリーの人々の価値を奪うことによって自らの社会的アイデンティティを相対的に高めようとする。農民による部落民差別。ドイツにおける、無職の若者の間での移民差別→ネオ・ナチ。

②役割距離 (**role distance**)：人間は、教師の役割・生徒の役割など、その都度の状況に合わせて、それぞれにふさわしい役割を自己として呈示することによって、相互行為

---

4 例えば、フーコーが「社会の承認」を受けコレージュ・ド・フランス教授という役割を引き受けなければ、エリクソンにとってのフーコーは、単なるセクシャル・マイノリティとして、「治療の対象」ということになるのかもしれない。

5 全盲の社会学者・石川准は、ゴッフマンの用いるアイデンティティに「存在証明」という訳語を与え、同一性を「存在証明」への脅迫と捉えている。エリクソン『アイデンティティ』の翻訳者である岩瀬庸理の同書後書きによれば、心理学では「自己同一性」、社会学では「存在証明」と訳すことが多いのだという。このことは、心理学ではアイデンティティを普遍的・安定的なものと捉えているのに対し、社会学ではそれを不安定で状況依存的なものと捉えようとしているということになる。

秩序を支えている。しかし、この役割に没入することは、虚構の自己の中に消えて無くなることであり、一種の「自己喪失」を意味する。そこで、ある役割を演じながらも、その役割から軽蔑的に距離を置くのが「役割距離」である。例えば、厳粛な場面たる手術室で、外科医がジョークを言うなど。

しかし、公的で制度的な役割に拘束される前者が世俗的なものではなく、私的で親密な関係において発現される後者が自由で聖なるものなわけではない。後者は、世俗的な役割の背後にある何らかの実体ではなく、役割からの距離＝ズレでしかない。仮面の背後には、仮面があるだけで素顔にはたどり着けない。ゴフマン理論のポイントは、「本当の自分」に見えるようなものは、複数の役割を掛けて置くことができるクギ (identity peg) に、過ぎないということにある。

→ 同一性は幻想であって、多元的な自己がノーマル。

5) ラカン：自己とは、「空虚」であり実体を持つもの。「言葉で言い表せないもの」。

6) フーコー

主体性＝従属化＝規範の内面化 → 「実存の美学」へ

モラル moral (← mores ; 習俗) と倫理 ethics (← ethike ; 性格) の区別

「力が欲望を生み、内側から人を動かすのであれば、これに対抗するには、あくまで自分の欲望—と言うより自分の快樂—に忠実であり続けるように、戦うこと以外に手段はないだろう。」

**田辺繁治『生き方の人類学』による比較表現**

アイデンティティ	実存の美学 (=アイデンティティ <sup>6</sup> 化)
権力関係の網の目、一点に凝集。 理念、法、制度のなかで定式化された主体 規範へ同一化する強いドライブ 固定した安定的な主体 普遍性、首尾一貫性 西欧近代特有の人間主体に由来	権力関係のなかで、自らの生を求める 過渡的、不安定、偶然的 主体の自由に支えられる 欲望と苦悩の中で、権力ゲームを演じる 不断に続く再構成 自分であることの承認を求める

**5. 今後の課題**

- 1) 晩年のフーコー (= 『快樂の活用』『自己への配慮』と講義録『主体性の解釈学』) をヒントに、ソクラテス(「汝自身を知れ」より「自己への配慮」が上位にある)
- 2) ストア派の授業を組み替えたい。
- 3) フーコーが高い評価を置いているキュニコス派のディオゲネスも授業でとりあげたい。
- 4) 「実存の美学」と「投企」の違いを鮮明に。
- 5) フーコーと精神分析学(特にラカン)の関係は、詳細な研究が必要。

6) フーコー自身は、「アイデンティティ」という言葉を使うことを周到に避けているという。「それはどのような主体なのか」といった問いの答えが初めからあるものではない。

## 参考文献

- 浅野智彦 1996 「私という病」 大澤真幸編『社会学のすすめ』筑摩書房 所収  
同上 2002 「社会学でわかる『私』という存在」  
浅野編『図解社会学のことがおもしろいほどわかる本』中経出版 所収  
同上 2005 「物語アイデンティティを超えて」上野編『脱アイデンティティ』 所収  
同上 2007 「自己を社会的に見るー固体的自己から流体的自己へー」  
張江洋直編『ソシオロジカル・スタディーズ』世界思想社 所収  
エリクソン『アイデンティティ』金沢文庫  
フーコー『言葉と物』新潮社  
ゴフマン『行為と演技』誠信書房  
同上 『スティグマの社会学』せりか書房  
橋本努『自由に生きるとはどういうことかー戦後日本社会論ー』ちくま新書  
石川准『人はなぜ認められたいのかーアイデンティティ依存の社会学ー』旬報社  
神崎繁『フーコー 他のように考え、そして生きるために』NHK出版  
G.H.ミード『精神・自我・社会』青木書店  
同上 『西洋近代思想史（上・下）』講談社学術文庫  
リースマン『孤独な群集』みすず書房  
田辺繁治『生き方の人類学』講談社現代新書  
鶴見俊輔他『転向再論』平凡社  
上野千鶴子『脱アイデンティティ』勁草書房  
吉本隆明『マチウ書試論・転向論』講談社文芸文庫